
草原の歌に花言葉を

かがみ豆腐

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

草原の歌に花言葉を

【Zコード】

N6273W

【作者名】

かがみ豆腐

【あらすじ】

自らの意思により、奴隸としての環境から逃げ出すことに成功したカルル。彼は王都を目指して草原を渡ろうとするが、その途中で狼に襲われてしまう。

そんな窮地に現れて救つてくれた者が居た。騎士はアカシアと名乗る、王都の追つ手から逃れるために荷馬車を貸してほしいとカルルに懇願する。

助けられた礼と、さらに幼き日の再会に感激したカルルはそれに快諾するが、それはつまり逃げ出してきた村をもう一度通りかかると

いう意味でもあった。

しかし引き返してきたカルルたちが目にしたのは、焼け跡と化したかつての村だった……。

序章（前書き）

だれだって幸せになりたいのです。奴隸も、英雄も。

そのために逃げて、時には戦います。

それぞれが理想を求めて現実に立ち向かうのはどこの世界も変わりません。

これも、そんな大海の中の一つのさざめきのような物語です。

誤字、脱字、わかりにくい描写や比喩表現など、おや？ と感じられた部分がありましたら指摘して頂けると幸いです。

序章

痛いほどに冷たい雨が降っていた。

そのおかげで人目はなく、家から出る者がいないのは幸いであった。誰にも見られたくない。

長い付き合いだった手枷は、足元に倒れる男の持っていた鍵束で外してくれた。

家から運び出した荷物を手早く荷馬車に積み込むと、彼は長年世話をさせられてきた馬に囁きかけた。

「逃げ切れると思うかい？」

「ぶるる」と馬は嘶いた。彼が喋ると必ず相槌を打ってくれる。

「……行こうか」

彼が軽く手綱を打つと、ゆっくりと木の車輪が回り始めた。

草原の出会い

緑の海。……と言つやつだ。実際の海を見たことはない。見渡す限り、視界には草原がどこまでも広がつていて。肌を焼く日差しは暑いくらいだが、風がなんとも心地よく吹いている。秋は近いらしい。

緑色をかき分けた田の前の一本道は朝からずつと変わらないが、景色の中で太陽だけが段々と低くなつてきていた。自分がいなくなつたことで、今この村は大騒ぎだらう。だが、もうそんなことはどうでもいい。あんな村に縛られることがなくなり、ようやく自分は自由を手に入れたのだから。

ふと、空を仰ぐ。

青と白だけの空を、こんなにも美しく綺麗だと感じたのはいつ振りだらうか。

その天井が赤みを帯び、太陽が地平の境に沈んでからはあつとう間に気温が下がり始めた。

そろそろ夜の準備をしたほうがいいのだらう。

なにぶん旅は不慣れなのだ。漠然とした不安があつてなかなか気楽にはなれない。

こんな時にはどうする、程度の知識があるだけで、具体的な経験というものはまったくない。

「冷えこんできたな……」

苦労してようやく火がついたころには、もう空と雲の判別が怪しいくらいにまで暗くなつてしまつていた。

「これだけだもんな……。さすがに心もとないよなあ」

一頭の馬が余裕を持つて引ける大きさの荷馬車。これにカルルのすべての持ち物が積み込まれている。

干した肉とライ麦の黒パンを齧つて腹を満すと、カルルは毛布を掴んで荷台に上がり、寝転がつて星空と向きあつた。

「綺麗だ……」

それ以上の言葉はなく、そういうえばと体を半分起こした。

「火、大丈夫かな。離れてるから燃え移りはしないと思うけど……

大丈夫だよね」

焚火の火は獣除けになると聞いたことがある。薪はこの草原では貴重だが、なるべく火は絶やさないほうがいいだろう。また横になつて目を閉じた。すると耳が冴えるのか、風の音も普段より聞き分けられるような気がした。

「…………？」

今のは何の音だ？

風の音にまぎれて一瞬、何かを感じた。音ではなかつたのかもしれない。

再び体を起こし、月明かりしかない薄暗い草原を見渡した。

「…………氣のせい、かな」

結局何も見つけられず、やがて睡魔に負けてカルルは深い眠りに就いた。

「…………？」

今のはなんだろうか。

さつきも同じようなことがあつた気がする。

だが、確かに今しがた、獣の鳴き声のような……。

強く砂利を踏む足音。

次いで、獣の悲鳴。

「…………？」

カルルは跳ね起き、周りを見た。

誰かが、誰かの背中が見える。暗くてよく見えないが、何をしているのかはすぐにわかつた。

ようやく目が暗闇に慣れてくると、三頭の狼がそこにいた。頭を低くし、唸り声をあげてその人物を遠巻きに威嚇している。

自分なら早々に腰が抜けてしまう状況なのだが、その後姿の人物は臆することなく凛と拳を構えていた。怖くはないのだろうか。

そして、あつという間もなく一頭の狼が飛び掛つて 思つた
時には、すでに引いていた拳でその鼻先を迎え撃つていた。
すごい。

すこし

思わず見惚れていった

しかし次の瞬間に別の狼が襲し掛けり、その者の太ももに露刃を喰いこませた。

- 1 -

好機とばかりにもう一頭も続々、わき腹にぶらむがゆつて食ひ
いつぐ。

悲痛な声に我に返つたカルルは、何か武器になりそうなものはと
荷台を見渡し、それを見つけた。

長劍

護身にとカルルが前の家から持ち出したそれ。未だろくに素振りすらしたことがなかつた。

……だからと言つて、いざ実戦となるとこんなにも重く感じられるのだろうか。

これを持つて野生の狼に挑み、その行法を学んでいっているのが自分でよくわかる。

怖い。狼は怖い。そんなのと命を懸けて戦つのはもつと怖い。自分ではどうか思っても、ねえ

分はなんと臆病なのだ。このままでは……

その結果こそ、カルルは一番恐怖を覚えた。

「うわああああああああつー！」

暗闇で鈍く光る長剣を握り締め、荷台を飛び下り、地面を蹴った。そしてすぐにその瞬間は訪れた。

突然の雄叫びに狼はカルルの存在に気づいたが、獣の性が簡単に
は咬みついた顎を離そうとはしなかつた。獣の黄色い目がぎょろり
と彼を睨み付けるが、それに怯むほどの思考の余裕はもう残ってい

ない。

たとえ剣としては使えなくとも……！

ドゴツ、というどちらかといえば打撃のそれに近い音のあと、足に咬みついていた狼が白目をむいて倒れた。

まさか本当に倒せるとは、とカルルが驚いている数秒の隙にもう一頭の狼は離れてこちらの様子を伺っていた。

「……っ、君……」

「え？」

よく通る、澄んだ声だった。それ以上の感想を述べることに意味はなく、狼に目を向けたまま返事をした。

「だ……大丈夫ですか？」

大丈夫なわけがないだろう、とわかつていたがそう言つしかなかつた。

カルルから詰めれば一秒か、狼からなら一瞬で詰められるであろう間合い。

不意打ちならばともかく、まともにやりあつて勝てる可能性などない。

「くそ……」

「剣を……」

「え？」

「剣を。私に」

その騎士はいつの間に隣に立つていたのだろ。

ちょうどその時、すうと月の光が雲の隙間から闇の中へと注いだ。

その美しさに子供のころに見た天使が光の中から降りてくる絵を思い出す。

淡い月光に映える長い金色の髪。短く切り詰められた甲冑は傷こそ少ないが使い込まれた歴戦の貫禄がある。そしてその凜とした翡翠色の双眸。……美しい横顔だった。

思わず息を呑んだカルルは女性の言葉を忘れてしまっていた。

「剣を。私にまかせてくれ。きっとあれを倒して見せよう」

我に返ったカルルは狼に注意をむけたまま慎重に剣を渡した。

まともに使われしたことなどない真新しい剣を見つめて、一言。

「少年。逃げることを恐れた臆病者のことを、人は英雄と呼ぶのだ」

その時、弾けるように鋭く 狼が飛び上がった。

一瞬の出来事だった。

薄いマントを翻らせ、まるで舞踏でも踏むかのように騎士はそれを真つ二つに斬り伏せていた。

「……私は成り損ねたがな」

夜風に吹かれて

「うむ、美味しい」

さつきの貫録はどこへや。」

妙齢の女性特有の愛嬌に満ちた、至福の表情でそう感想を述べると騎士はまたひと口と狼の肉を頬張った。

聞けば名はアカシアと言つそうで、仕留めた狼の肉をたき火で炙つては口へと運ぶ彼女からはなんとも旅の経験が伺える。

「しかし危なかつた。陽が落ちて草原をさまざまといふと、遠くに火の光を見つけてな。私がたどりつく前に火は消されてしまつたのだが、どうも獸の気配を感じたのだ。放つておくわけにもいかず、というわけだな。君が目を覚ましたのはそれからだ」

どうやら自分が寝ている間に狼に襲われかけていたらしい。それを彼女が助けてくれたということだそうだ。

「本当にありがとうございます。それと……、すいません」

「？ どうしてカルが謝る

「……もつと、……」

思い返すと情けなくて声がすばんだ。

「ん？ なんだ」

「もつと早く僕が出ていれば……アカシアさんは怪我をせずに済んだはずです……」

するとアカシアはふっと鼻から音を出し、水袋からひと口飲んで穏やかな口調で言った。

「カルのせいではない。それに君は私の手当をしててくれた。それで十分だ」

小さな鎧の隙間から服を捲し上げるとわき腹が見えた。カルルの着替えを裂いた布が巻かれており、手当てをした時の柔らかい感触が脳裏に甦ったカルルは氣恥ずかしくなつて目を逸らした。

「ん。どうかしたのか？」

「い、いえ……なんでもないです」

「ふむ……。 カル」

「は、はい」

「君は今、いくつだ?」「

「へ?」

「年はいくつなのかと聞いている」

「年……は、十七です」

「私と三つしか変わらないな。君は敬語で話すのに慣れているようだが、もっと堂々としたらどうだ?」

「……そう、ですよね……。気を付けます……」

慣れていのではなく、今までそれしか出来なかつた。だがしかしそれを彼女に言つても仕方がない。なにより自分について詮索を受けたくないのだ。

「まあ好きにすればいいさ。といひで」

「はい」

「私も荷台で寝ようと思うんだが……構わないかな?」

豪快な欠伸だつた。せめて手で口を覆うくらい、と言つても恐らく無駄なのだろう。

「え……ええ

「ありがとう。では、話の続きをまた明日な。おやすみ」

一方的に話を切ると騎士は荷台によじ登つておもむろに甲冑を脱ぎ捨て、寝転がるとすぐに静かになつた。

「……ふう……むにゅ」

悪い人ではないのだろう。……たぶん。

ぱちぱちと燃えるたき火に残つていた木切れをすべてくべ、カルルも眠ることにした。

「でもなあ……」

それがいくら小さな荷馬車で、多少の荷物が積んであるとはいえ、足を伸ばして寝るのには十分な余裕がある。

だが、そこに一人ともなれば話は別だ。

猫のように身を丸めて横になっているアカシアの隣には、カルルが寝るにはなんとも微妙な隙間が空けてあるのか、……それとも空いているだけなのか。

後者だった場合を考えると、ここに無理やり体を押し込むのは流石に遠慮するべきであろう。

「……寝るんじゃないのか？」

不意に目だけ開いてそう言われた。

「……もっと寄ってくださいよ」

「そうか、たしかに冷え込むからな。君がそう言つのならば」「いや、ちょっと、逆です、そつちに詰めてくれって意味です」

「ああ、そういうことか。……ん、これでいいか？」

「はい。……それで、アカシアさん」

「なんだ？」

「さつきあなたが話の続きを明日ひて……。でも、明日すぐに出発するつもりなんですけど」

「ああ、私もそのつもりだ」

「いえ、ですから。いつ、その話をするんです？」

「？ 道中でゆっくりと話せばいいと思うのだが」

「……ああ、アカシアさんも行先は都の方角でしたか」

「なに？」

「え？」

「王都に行くのか？ カルは」

「え、ええ」

「……まいつたな」

のそりと起き上がるとアカシアは頭を抱えた。

「あの……僕が王都に行くとまずいんでしょ？ つか

「いや。カルではない。私が……。ふむ、やはり今話し合ったほうが良さそうだな」

話し合い、と言いながらもアカシアの口調と眼つきには穏やかではない色がこもっていた。

一体、どれほどの敵を切り伏せてきたのだろう。
ずっと生き延びるために必死だつた。

自分を殺しに来る敵が、ただただ怖かつた。

名も知らぬ相手に剣を振り下ろすうち、いつしか『戦神アカシア』
などと呼ばれるようになつていた。

それが使命と信じ込んで、命を奪うことにする躊躇しなくな
つたのはいつからだろう。

……半月ほど前、ある国で権力の頂点だつた国王が戦死し、その
後を王子が継ぐことになった。

まだ若い王子は腹に一物を抱えた老人の言葉を鵜呑みにしてしま
い、その国の英雄として讃えられていた者を処分することに決めて
しまつた。

それ自体はあまり珍しい話ではない。

未熟な跡継ぎが王たる資質を養うために失敗を重ねるのは自然な
ことだ。

だから、王宮に仕える親友にそれを告げられた時も大して驚きは
しなかつた。ああ、やはりそうなつたのか、と。予感はしていた。
今の王に弁明の声は届かない。

だが、こちらとてそんな理不尽に殺されるつもりも毛頭ない。
ならば逃げよう。自分にはこの生き方しかできない。

幸か不幸か、物心ついた時には家族はどこにも居なかつた。しかし、自分が姿をくらましてその帮助を問われないよう、忠誠を誓つ
てくれた部下を裏切る必要があつた。

あの、何事にも生真面目だった部下。

自分の娘ほどの年齢の相手に、彼は気を失つまで殴られることも
厭わなかつた。

何度も殴打され、痛みを叫ぶのは部下のはずなのに、自分ばかり

が泣いていた。

そして、夜中に門兵が全員居眠りをしている隙を突いて門をくぐつた。

寝言と言ひはる彼らに独り言の別れと礼を残し、夜の草原へと馬を走らせた。

死神とまで謳われた英雄が、死刑を前にして逃亡。

後ろ指などいくら刺されても痛くも痒くもないが、同じ釜の飯を食つた連中との別れはやはり辛かつた。

逃走劇は成功したように見えた。自分自身、安心して馬に気を遣う程度の余裕も持ち始めていた。

だが、若い王は早く実績を作りたかったのか、裏切り者の処分に特に力を入れて動いたらしい。

追手は予想よりもずっと早く追いつき、馬を射止められてしまい応戦を余儀なくされた。

戦いには勝利したものの、自分は剣と馬を失い、追手の者も死ぬ間際に愛馬を道連れにした。

結局、自分の足で草原を行くしかなくなつたのである。

捕らえられれば裁判もなく処刑されるだろう。あつけないほどに生き残るには王国が滅びるか、追手の及ばない他の勢力圏まで逃げ切るしかない。

「アカシアさん？ どうしたんですか、急に黙つて……」

「…………カルル」

「はい？」

「頼む。どうしても私は王都から早く離れたいのだ。そのためにはこの馬を貸して欲しい」

これほど必死に人にものを頼んだのはきっと初めてだ。だが、言葉を濁すカルルに胸の奥が重くなる。

「…………頼む」

「…………」

そう簡単に頷いてくれるとは思つていなかつた。だからといつて

手荒な真似をするのは本当に最後の最後にしたい。

そんなことを考えているうちに、ふと疑問が浮かんだ。

逆に、どうして彼は王都を目指すのだろう。理由もなく人の頼みを無下にするような性格には見えない。よほどの目的があるのだろうか。

「……なあ、カル。そういうえば聞いていなかつたが、君はどうして王都に？」

「……」
より一層カルルの表情が強張つた。それは何か、彼の触れられたくないモノに触れてしまった反応。

「カル？」

「……僕は……」

俯いて服の裾をぎゅっと握り、消え入りそうな声でカルルは言いかけた。だが次第に顔が青ざめ、ふつと。

「カルルっ！」

少年は気を失つて倒れてしまった。

くさい。……嫌いなにおいがする。

朝起きて一番初めに抱いた感情は『不快』。昨日も、今日も、明日もずっと。

「いつまで寝てやがるつー。そつぞと羊の世話をしうガキー。」
なにも言い返さない。言い返せないんじゃない。無駄なことをしないだけだ。

「つたく……使えねえ奴隸だ。たまつたもんじやねえよ」

愚痴を溢しながら男が馬小屋から消えると、カルルはそもそも起き上がつて背筋を伸ばした。

そして、ため息。

家畜の糞尿の臭いが染み付いた寝床が、今度は仕事場になる。
仕事場と言つても、給金を貰つて稼いでいるわけではない。馬車馬のように使われ、怒鳴られ、腹を蹴られ、いつしか夜になつてゐる。

好きでこんなところに居るわけではない。この村は人さらいに遭つた子供が連れてこられ、様々な用途の奴隸として取引されてから使役される。

そして自分と同じような境遇の者は皆、目が死んでいる。最初はなんとか脱出しようと頑張るのだが、口数が減り、次第に表情が消えていく、瞳から光が失われて虚ろな目をするようになつていく。
自我を失つて本当に家畜と同じになる者。悲観して泣きながら体中を噛んで死のうとする者。

今では見ただけで、その子供があとどれくらいで諦めるかがわかるようになつっていた。

誘拐されて七年も生き長らえた奴隸は初めてだと、誰かが話しているのを聞いた。

きっと、自分は運が良かつたのだ。

すぐ嫌なことをされても、その気持ちを和らげてくれる『抛り所』が自分にはあった。

それのおかげでどんなに辛くても歯を食いしばることが出来た。このオカリナを胸に抱ぐだけで、思い出が嫌なものを見つめさせてくれる。

吹くと持っているのが知られるから、毎晩指だけ動かしたりして思い出に浸つた。

名前も知らない少女の笑顔。

お互に吹きあつては笑いあつた記憶。

それだけがカルルを認めてくれた。どんなに軽蔑されても、それがあつたから聞き流すことができた。

その夜は珍しく、酒に酔つた家の主人が鼻歌を歌いながら馬小屋にやつってきた。

れつが悪く言つていることは半分ほどしか理解できなかつたが、どうやらこの家の奴隸は長持ちだから買い替える金がかからなくて羨ましいな、と誰かに言われたそうだ。それと酒の酔いも相まってか「褒めてやる」などということいらしかつた。

……なんとくだらない。

最初はあまりの馬鹿馬鹿しさに、呆気に取られて舌の回らない男の話を聞いていた。

だが、ふと気づく。そして短い葛藤のあとに覚悟を決めた。

カルルは立ち上がると両手を繋ぐ枷の鎖を男の首に巻きつけ、交差させながら思い切り締め上げた。男の反応は鈍く、思つてもみなかつたほどに非力だつた。

ろくに体を動かすことがなく、よく肥えた首の肉に鎧を擦りつけながら鎖が深く巻き付く。

「あ……やめる、やめ……おっ……やめえあ

あのふんぞり返つて大きく見えていた奴が、実際は自分よりチビの禿げ頭でしかなかつた。

こんな奴に……っ――

自分の両手首を背負い込み、肩越しに力任せに引き上げる。

カルルが本気を出しきるまでの間、気持ちの悪い静寂があった。そして、蚊の鳴くような断末魔を耳元で聞くと、腐った木の枝が

折れるような感触を得たのだった。

「 つー」

勢い良く体を起こし、隣にいた誰かに掴みかかつてた。

「 はあつ…………はあつ…………！」

ようやく自分が寝惚けていたことを理解してアカシアの体から手を離した。抜きかけた短剣を收めると彼女は言つた。

「 かなり、うなされていたぞ。怖い夢を見たんだな」「 夢…………？…………いや、…………夢じやない…………」

「 どうした？」

「 ……」

忘れる事とはできるのだろうか。

今までに受けた苦痛はそのうちに薄れていぐだらう。だが、一線を越えた事実は決して消えることはなく、記憶の付箋として残り続ける。

「 大丈夫だ。何も怖いことなどないぞ」「 頭を優しく撫でられた。

「 ところで。…………君に聞きたいことがある」

ずい、と顔を寄せられて思わず身構える。落ち着いてきた呼吸が別の意味で乱れそうになる。

「 ハロッサ、という町を知っているか？」

「 ……」

知らないわけがない。七年もの苦痛な歳月をそこで過ごしたのだから。

どんな顔をすればいいのか、そして自分は今どんな顔をしていたのか。悲しそうなアカシアの表情に申し訳ない気持ちが溢れてくる。

「……そうか。やはり、そういうことか」

推測が正しかつた、とアカシアは声を落とす。

「君が氣を失つて、介抱しようとして見つけてしまった。その手首の跡は……見覚えがある」

「…………」

自分の手首を田でなぞつた。外してから間もない鉄の枷の跡はまだはつきりと焼き付いたように赤く痣として残つている。

「君が都へ急ぐ状況も理解した。……だからこそ、頼む。君に降りかかる火の粉は私がすべて払う。だから」

「わかりました」

「…………ん？」

「いいですよ。もう、おまかせします」

「カルル…………？」

アカシアに背を向け、荷馬車から降りて夜の草原のじじまの向うを見据える。

ハロッサから逃げ出したあたりから、薄々わかつっていた。

都に帰つたところで、思い出を取り返すことなど出来はしない。ましてや、あの時の少女との再開など夢に妄想もいいところ。

自分が木の枝で叩かれていた間に、少女は様々な経験をして喜怒哀楽を育み、素敵な女性になつたのだろう。

あのひと時の幸福感を与えてくれた笑顔すら、実はもうおぼろげにしか思い出せない。

「…………？」

オカリナの音色がして、ふり返つた。

粗末な荷馬車の上、月明かりに照らされながらオカリナを吹いている者がいる。

それは彼女しかありえないのだが……そうではない、この吹き方を自分は知つているのだ。

いや、それ以前にこの旋律は……。

一息分ほどの演奏が終わると、彼女はオカリナを唇から離して咳いた。

「……不思議な感覚だ。すっかり忘れていたと思っていたのに、指が憶えている。耳が思い出しても、また次の音が頭に浮かんでくる。とても心地が良い」

巧いか下手かではない。

その短い演奏にカルルは涙が溢っていた。

「ああ、……すまんな、話の途中に。懐かしくてつい、手に取つてしまつた。って、おい、どうした？」

鼻声になるのが嫌で、黙つて首を横に振る。

「大事な物だつたのか……。悪かつた」

「違うんです、そうじやない……」

「では、どうしたと言つんだ？ なぜ泣いている」

「あなたは……その曲をどこで？」

「曲？ あ、ああ。今のはな？ 私が幼いころに、ある少年から教わつた曲なんだ」

ぐつ、と胸が詰まる。

そんなまさか。

「変な話をするが……私は戦災孤児でな。両親ともに失つて、王都の孤児院で暮らしていたんだ。いつも一人で過ぐしているような子供だつたよ。同じくらいの年の子ともあまり遊ばないで、いつも形見のオカリナを吹いていたんだ」

戦災孤児。

王都の孤児院。

カルルにも懐かしい言葉だつた。

夜中にトイレに起き出して、部屋に戻る途中でさらわれるまでは、

カルルもそこで暮らしていた記憶がある。

「それで、私のことをじつと見つめている子供がいたんだ。新しく入ってきた子で、話を聞くとその子も私と似たような境遇だつた」

その時はきっと、さぞかしモノ欲しそうな目で彼女のことを見ていたのだろう。オカリナを胸に抱えて警戒された覚えがある。

「聞けばその子も母親がよくオカリナを吹いてくれたらしい。その時にあの子から教わった子守唄、それがいま、私が吹いた曲なんだ」「……その子とは、それから……？」

「ん、ああ……居なくなつたんだ。ある日突然、ぱつたりと。迷子では……ないだろうな」

「じゃあ、その子の名前は」

「いや……。思えばなぜ聞かなかつたのだろうか。あんなに仲良く……していたのに」

手に持つた白い陶製のオカリナを見つめ、アカシアは思い返した。そうだ、あの時は貸したまま別れて、それであの子は居なくなつてしまつた。あの時は形見を盗まれたと大泣きしたが……。

そういえばあのオカリナによく似ているなと思い、何となくそれを裏返してみた。

すると、見覚えのある一対の剣の紋章に目を奪われた。
とある貴族が戦での功労に剣の誉れとして王から授かつた名誉ある家紋だ。

「…………え？」

それを見た瞬間、走馬灯のように記憶の断片が次々と甦つた。
転んで危うく割つてしまいかけた時の傷や、それを隠そつと不器用な母が塗つてくれた、少し色の違う白色。

そして確信した。

「これは……」

間違いない。

これはあの時に失くしたオカリナだ。

「それをあの子に返すことだけを考えて、今日までなんとか生きてこれました」

「カルル……」

信じられないという顔でこちらを見つめる騎士は、あの立派な出

で立ちを忘れてしまったほどに幼く見えた。その姿に当時の記憶が重なり、再び涙が滲んできた。

「それはお返しします。何度助けてもらつたかわからないけど……もう、無くても大丈夫だから」

「そうか……君はあの時の……あの時の……そつなんだな？」

頷く。

言葉はなかつた。口を開くよりも早く抱きしめられ、言葉が言葉にならなかつた。

肩の後ろから声がする。目の前には暗い草原が広がつていてだけ。何も見えないが、とても温かく心が安らぐ声だつた。

「良かつた……生きていた……生きてた……」

「……死んだと思つてましたか」

そう言つと、アカシアは肩を掴んで向き合つ姿勢で言つた。

「ばか、あんな小さな子供が急にいなくなつたりしたら……、そう思つてしまつだろう……、ばか」

「そんなに泣かれると……僕も困ります」

「……感情に我慢はしない主義なんですね」

鼻をすすりながら開き直つても様にはならない、とは言わずにおいた。

「そうか……うん、良かつた。よし、寝ようか」

「え？」

背を向けてひとりで荷馬車にもどると、アカシアは半分だけふり向いてバツの悪そうな顔で返事をしてきた。

「いやはやなんというか……恥ずかしくてな。人前で泣いたことなんて本当に孤児院以来なのだ。寝て、今のは忘れてくれるとありがたい」

思つたことをすぐに口に出す　と言えばまあアレだが、ここまで素直に感情を晒す人も珍しいのではないだろうか。案外、中身は昔のままなのかもしねり。

「なんだか想像してたのと違つなあ……」

しかし、思い出は思い出のまま美しくあればいいではないか。運命は数奇なものと言つ。その一端と納得すればそれまでのことが親を失つたこと。誘拐されて売り飛ばされたこと。人を……殺めたこと。

ならば思い出の少女が狼を切り伏せる騎士になつていたくらい、なんということはない。

と、納得することにした。

「何の話だ？」

「いえ。なんでも。それより星が……綺麗ですよ」

「ん？　　ああ、そうだな。まるで降つてくるようだ。すこし怖いくらいに」

「…………」

「くあ……おやすみ」

「おやすみなさい」

しかし残念なことにカルルにまどろみが訪れたころにはすでに空は白み始めていて、疲れもろくに取れていないと不機嫌に唸るアカシアには寝惚けて顔に蹴りを入れられた。

気まずそうに荷台で剣の手入れをする騎士という新しい荷物を乗せた荷馬車は向きを反転させ、新しい旅にカルルは手綱を打つたのだった。

草原の外には、「水の草原」が広がっていると内地の者達は言った。

しかし船乗り達に尋ねると、彼らは内地に「緑の海」が広がつていると答えた。

大昔の、とある冒険家が残した有名な台詞である。彼の偉業を讃える演劇では必ず冒頭にこの言葉が挨拶代わりに語られる。

「海は見たことないけど……似てるんだろうなあ」

どこまでも緑色の大地の中、そこに川の流れのように敷かれた草の生えない道を荷馬車で行く。

この道を外れると方向を見失つてしまつため、決して離れてはならない。

何も目印のない草原を無闇に歩こうものなら、それは目隠しをして彷徨うのと同義である。すぐに自分が真っ直ぐ歩けているかどうかが疑わしくなり、振り向きでもしようつものなら今度は「前」がわからなくなる。

話では海もそんな感じらしい。

大きく違うのは草原には「道」があり、それさえ視界に入れておけば遭難することはないという部分だろう。

「ほんと、誰がこんな道を作ったんですかね？」

ねえ? と御者台から後ろを振り返るとアカシアの大きな欠伸があつた。御者台で馬の手綱を握るカルルからすれば、自称「見張り」の荷台でじるじるするだけのアカシアは暢氣なものだつた。

「ふむ。退屈も過ぎると人は哲学的命題に挑むと言つが……」「気分転換に、どうです?」

手綱をアカシアに示して言つてみると。もちろん交代してくれるとは期待していないが。

「いや。私はここで怪しい輩を警戒する任があるからな。操舵は力に専念してほしい」

「警戒、ですか……」

草原の道には分岐こそあるものの、基本は一本道である。

「怪しい輩」が来るとすれば、前か後ろかだけなのだ。時々振り返るだけしていれば、そう気に留めることでもない。

人の真後ろで堂々と爆睡は気が引けるが、不可抗力でのうたた寝なら平気らしい。

見張りに意味がないと気がついていないフリをしているにしてはどうも演技がうますぎる。

ならば本気で警戒しているのか、かなりの天然なのか。

心底どうでもいい推考だが、退屈しきにはこのくらいがちょうど良い。

「まあ半分は名田なのだがな。この状況で見張りなんて必要ないのはわかっている。それでも、もう半分は本気さ」

「……と言つと?」

「稀にだが、草原で旅をしていると『出合ひ』ことがある

「ああ、おどぎ話ですね?」

親が子どもを怖がらせるのに使う、草原の悪魔のおどぎ話がある。

「はは。……そうだ、お伽噺さ。誰でも知っている有名な話。その原作とも言つかな」

「原作? あのお化けが、つていう話じゃないんですか?」

「いや。大体は同じだよ。そうさな、これはいつだったか……私が初めての遠征に出た時の話だ」

雲がまばらな青空を見上げ、アカシアが語るのをシャンは背中で聞いていた。

大地のほとんどが草原だとはいえ、地面の土が見えるくらい草の浅いところもあれば、背丈をゆうに超える、それこそ何かが隠れていて急に飛び出してきてもおかしくないような場所もある。

その時は草の丈が腰くらいの、わりと深いところで野営をしていた。

馬車が三台は横に並べるくらい道が太くなつていて、そこに數十名の傭兵が火を囲んで夜を過ごしていた。

夜が更け、全員が雑魚寝をしているのが見渡せる位置にある馬車の上でアカシアも寝そべっていた。

すると、月明かりの下で誰かがむくりと起き上がるのが見えた。
(小便か……?)

ふらふらとおぼつかない足取りで歩くその者は、あと一步で草原というところで一度立ち止ると雑魚寝の一団を振り返った。

それからやや間があつて、また前を向くと草原に足を踏み入れていった。

(道を見失うくらい離れるほど馬鹿じやがないだろ?)……)

そう思つて瞼を閉じた直後、誰かが声を張り上げた。

「おい！ お前どこまで行くんだ？」

その声に起こされ、草原を歩く男の背中に視線が集まりだす。「離れすぎだ！ 小便くらいその辺で出来るだろ?」

「それとも、何かいいモノでも見つけたか？」

一同に笑い声が響く。草原に現れる美女の悪魔のお伽噺に掛けた冗談だったのだろう。

だがそれも、振り向いた男の一言に皆が凍り付いた。

「お前ら……あれが、見えないのか……？」

蒼白な面持ちでそう言った男を、誰も冗談とは思えなかつた。

「じゃあ、あれは……」

と、男は前に視線を戻した。

そしてすぐ、

「わ、うわ 来るな！ 離せ、このつ！」

「おいつ！ どうした、戻つてこい！ 戻つてくるんだ！」

何もないはずの場所で必死にもがく男に周りの声は届かないらしい、拳旬にその男は道に背を向けて奇声を発しながら走つて行つて

しまった。

「……とまあ、その男が見たのがお伽噺の悪魔かどうかはわからな
いが、そういうことが実際にあったといつことだ」

「…………」

「どうした？」

「いえ……そういう話は苦手なんです」

「そうだな。私も大の男が悲鳴を上げながら走り去っていったのに
は恐怖したよ」

そつちかよ、とは言つても仕方ない。

その手の恐怖に対しての耐性が自分にはないだけなのだ。能天氣
と言えば失礼だが、そういうところは羨ましい。

「その時に具体的に何が起こったのかは理解を越えるが、似たよう
な話を方々でも耳にする。それがお伽噺のそれなのかは置いといて
も、だ。万が一があるということが言いたかったのだよ」

「…………わかりました。それではまた見張りをお願いします」

「まかせてくれ。たとえ悪魔が出ようとも君には触れさせんよ」

そう言われると複雑な気分だった。年上とはいえ女性に守られる
立場というのは。

だが実際にアカシアのほうが上手うわてなのだからどうしようもない。
事が起きたらどうしようもない。

事が起きたらどうしようもない。

彼女がその気になれば荷馬車を奪つて一人で逃げるところくらい容
易なはず。

（馬鹿だなあ……）

じついう考えばかり思い付くのは、そういう大人しかいない町で
長く過ごし過ぎたからだろう。

「…………あと、もう少しでハロッサに着きますよ」

「そうか。それじゃあ一旦、この辺で止めてくれ」

「！　はい」

馬に合図を出すと、数泊遅れて荷馬車が動きを止めた。このまま
ハロッサの門をくぐれば、顔の知れているカルルは簡単に捕まつて

しまつのは分かりきつている。

なにか、案でもあるのだろうか。

「いのまま行けば君は捕まつてしまつからな。一応、考へていたのだ」

「どうするんですか？」

まずは、ヒアカシアは自分の小さな荷袋を探り出した。はち切れそうなぎゅうぎゅう詰めのそれから引つ張り出したのは一着のローブ。

「君にこれを見てもらひつ。大きさはまあ、大丈夫だろひ」

「え……これは？」

「私もいつまでもこの格好では不便だからな。王都の刻印もそこら中に入つてゐるし。町に着いたらこれに着替えるつもりでいた」

「はあ……」

とりあえず相槌を打ちながら、カルルは茶色い女性用のローブを手に取つてしげしげと見つめた。変装、ということらしい。いや、女装になるのだろうか。

「フードを深く被り、ずっと俯いていてくれればいい。別に気にする者がいても、連れは顔に呪いを受けていると私が言つてやる」

「……。でも、この荷馬車は？ これだつてあの村の物なんです。すぐに気付かれますよ」

「この村に来る途中で奴隸のような格好の子供に襲われ、仕方なく切り伏せて奪つた。……という筋書きを考えているのだが、どうかな？」

先程の自分の考へが頭によぎつた。

「完璧です。それでいきましょひ」

「よし、じゃあさつそく……」

アカシアの手がカルルの胸元のボタンを外しに掛けた。

「いや、まつ……自分で脱ぎますから！」

「怒ることはないだろひに……。ところで君はこれの着方を知つてゐるのか？」

「着た」とはないんですけど……。被つて腰のひもを縛るだけでしょう?」

アカシアは残念そうにため息を吐き、カルルが着替えるのを待つた。

そして最後に腰のひもを結び始めた時だった。

「ああ違う、そうじゃないんだ」

期待して待っていたかのように素早くひもをカルルの手から奪う。「結び方ひとつを取つても流行り廃りがあるんだ。どんなに世間知らずの田舎の娘でも片結びはしないだろ?」

「……そうですね」

世間知らず、という部分が引っかかったが大人しく結び終えるのを見ていた。

「まあ、蝶々結びが無難かな」

形の整った綺麗な結び目に満足したように言い、カルルも彼女の意外な器用さに驚いた。

それから一步下がるとアカシアはカルルの頭の上から爪先までを無遠慮なまでにじっくりと見つめ、

「ふむ、悪くない。いや……むしろ良い。華奢な体と顔つきが幸いしたな」

妙な視線を受けながら差し出された手鏡を見ると、何ともいえない気分になつた。

「とても似合つているぞ」

「……勘弁してください」

「この町娘つぶりならいからに知つた顔といえど早々に気づかれることはないだろ?。さっさと通り抜けてしまえば大丈夫さ」

「……行きますか

「ああ。それとカル、これを懷に」

「?」

寝ぼけて掴みかかつた時に一瞬だけ見た短剣だった。

「いくらなんでも丸腰ではな。あの長剣よりはこちらのほうが使い

易い」

持つてみると短剣というよりは少し大きめのナイフといった印象だ。懐に携帯するにはこのくらいが良いのかかもしれない。

「ありがとうございます。……あの丘の向こうにハロッサが見えるはずです」

頂上に生える木が親指ほどの大きさに見える丘を指差した。あそこの上に立てば、あの忌々しい村を見渡すことができる。

……無事に抜けられるだろうか。

そんな気持ちが顔に出でていたのかもしれない。

「なあに、多対一も私の得意分野さ」

「得意分野？」

「……いや、例えが悪かった」

バツの悪そうな顔をして訂正した。

「狼より強い人間はさすがにあの村にはいないだろう？」

と笑つて見せる。それにはカルルも肩を揺らして頷き、御者台へと移るアカシアに手を差し伸べた。

その時は、丘の向こうに見える空が曇っているのはこれから雨でも降るのだろうと思つていたのだった。

おじいちゃん（後書き）

感想を頂いたことでもチベーションが凄まじくあがり、自分でも驚きました。

チベーションを燃料とすれば私の飛行機はもう低空飛行どころか常におなかが削れているような状態なのでありがたかったです。

救済の名の下に

「何だこれ……」

丘の上から見渡した平原には、確かに存在していたかつての村は無く、代わりに焼け落ちてまだ薄い煙を立ち昇らせている村の跡が残っているだけだった。

近づく毎にその様子は鮮明になり、出入りの門から民家の倉庫まで、村のほぼすべての建物が無残にも焼き落ちている。

カルルは呆然としながら村の中央の広場まで荷馬車を進め、そこでようやくこの惨状が誰によつて引き起こされたのかを知ることとなつた。

「兵士……？」

鉛色の甲冑に身を包んだ兵士が十数人、どうやらこれは彼らの仕業と見て間違いないようだ。

「……貴女方は？ 先に名乗つて貰えますかな」

馬に乗つた真鎧色の甲冑を着けた男が言つた。ひとりだけ色が違うのは彼が指揮官で、槍を持つた残りが部下ということだろう。歩兵の顔は甲冑で見えず、表情がわかるのはその年配の男だけだ。

一人は荷馬車から降り、質問にはアカシアが答えた。

「名はアカシアという。王都アリシルより、特命を受けている。ここを通つたのはその道中だ。貴官らは何者か」

特命とわざわざ口にしたのは彼らも同じアリシルの兵士だと判断したからだろう、とカルルは思った。アカシアの甲冑は少し仕様が違うようだが、見た目の特徴が彼らのと良く似ているのだ。

それを聞いた指揮官らしき男は年相応の柔軟な顔で驚いた反応を示した。

「貴女がアカシア殿？ なるほど、確かに話に聞く通りだが：

……随分とお若い」

「よく言われる」

そつけなくそれだけ返すと、おつと、と思に出したかのよつに男が続けた。

「いやはや失礼。私はルイーグ、ルイーグ・コルト。我々もまあ……特命といいますかな。……して、そちらのお嬢さんは」「思わずびくっと肩が跳ねた。それを怯えさせたと勘違いしたのか、ルイーグと名乗った男はわざわざ馬を降りてこちらに歩み寄つてき

た。

「おつと……。馬上から挨拶など失礼をお許しください。しかし決して、貴女を怖がらせようというのではないません。どうか、お顔を上げて下さいませんか」

この年でその立場ならもつと高慢な性格を想像するものだが、ルイーグという男の物腰の低さは逆に相手を委縮させてしまつほどだ。別の意味で指揮官向きの人間性と言える。

しかしカルルは慌てて隣のアカシアを小突いて助けを求めた。

「ああ ルイーグ殿、すまない。彼女は顔を人に見られるが怖いのだ。呪いを受けていてね」

あと数歩のところでルイーグが立ち止まつたのがわかつた。

「そうですか……それはお氣の毒に」

ルイーグは振り返ると焼け焦げた家々を見渡して語り始めた。

「軍属……このよつな身ではあります、人の心はまだ残しているつもりです。私はこれまでに赴いてきた地で、未来に傷を負つた子供たちを多く見てきました。不幸な子供をひとりでも多く救済しい……それが私の望みなのです。……この村がこんなことになつてしまつたのは確かに我々のせいに違ひありません。我々が役目を果たそうとすれば、必ずそれを邪魔する輩が居ますから。争いは耐えないのです。それでもここのような、余所でさらわれた子供を奴隸として使うような村はすべて潰さなければいけません。若い世代が我々の世代の苦労まで背負うことはないのですから。その世の中が実現するまで、どうか貴女にも強く生きていてほしい」

「ルイーグ隊……聞いたことがある。『救済の兵士』、と名高い?」

「お恥ずかしい。そう言つて貰えるだけで

「嘘をつくんじゃねえよっ！…」

瓦礫の陰から飛び出した男がそう叫んだ。すぐさま歩兵に取り押さえられ、地面に組み伏せられて凶器らしき農耕具を取り上げられてもなお、顔だけルイーグに向けて吠え続けた。

「なにが『救済の兵士』だつ！ なにもかも奴隸の子供まで

その叫びはルイーグの靴の爪先が男の鼻を蹴り潰す音で途絶えた。

「黙らせろ」

男の口に猿轡が噛まされる。

「ルイーグ殿。これはどういうことか」

アカシアの声にカルルすらぞつとする冷たさが宿る。

それに答えるルイーグの柔軟な笑みも先ほどとは違つて見えた。

「なーに、逆恨みでわけのわからぬことを叫ぶのはよくあることです」

その視線が見えない取引でも持ちかけているようだつたのがカルルにも感じられた。

「……ひとつ、お聞きしたい」

「？ なんでもどうぞ」

「ここで『救済』された子供は？」

「それは……あそこの荷馬車の中に。我々の荷馬車です」

「人数は」

「……ひとりです。かわいそうに、他は皆、彼らの手によつて。奪われるくらいなら殺してしまえと、凄惨な光景でした」

ルイーグに指を差され、兵士に縄で縛られた先程の男が暴れた。が、すぐに押さえられ、猿轡のせいで言葉も聞き取れなかつた。

ルイーグがそちらを見ている隙にアカシアがカルルにそつと囁いた。

「カルル。君がここを離れる時に居た子供の人数はわかるか？」

「……十三人です」

「そうか」

アカシアは再びルイーグのほうに目を向けて、

「ならば、その亡骸を確認したい。よろしいか？」 ルイーグ殿
「…………ええ、よろしいでしょう。では私に付いてきてください。お前達はここで待っている」

「はっ」

槍を携えた兵士たちは威勢のいい返事とともに姿勢を正した。ルイーグの後に続いて歩く途中、アカシアが耳打ちしてきた。

（私から離れるなよ）

「え？」

思わず聞き返したがアカシアはそれを無視してルイーグの後を追つた。不穏に感じながらもカルルは少しアカシアに詰めて歩いた。「子供たちはここで村の者に…………助けられなかつたのが残念でした」

火の手を受けていないある建物の前に来るとルイーグが立ち止まつた。

三人が中へ入るとそこにはただ物のように並べられた、変わり果てた姿の奴隸の子供たちの姿があつた。

「ひどい…………」

胃からこみ上げてくるのを堪え、カルルは惨状を目に焼き付けた。血の氣の引いた幼い顔はすべて知つてている。頭が真っ白になつて倒れてしまいそうだつた。

それに……。

「ここが穀物の倉庫に使われていたことをカルルは知つていたが、なぜ殺される寸前の子供が倉庫に居たのかという理由は思い浮かばなかつた。いくら労働力が大事だからといつても食糧と同じ場所に閉じ込めたりはしない。

そういうえば、ここに入れられていた穀物の袋も見当たらぬ。

「どうやら、奴隸用の倉庫としてここが使われていたのでしょう。

我々が踏み込んだ時にはすでに……

ぞくり、とカルルの肌が粟立つた。

アカシアを見るが、彼女は倉庫に足を踏みいれてからざつと横たわった亡骸を慎重に調べていてカルルには目もくれない。

そんな彼女が唐突に声を発した。

「ルイーグ殿よ」

「……なんでしょう？」

「たった十人足らずの戦力で、良くこの村を制圧出来たものだ。こんな村では特に抵抗も強かつたろうに。おみそれした」

とは言いつつも声色は冷たいどころか棒読みに聞こえる。
感嘆の言葉が意外だったのか、ルイーグはこんなことを口にした。
「いえいえ。ろくに戦闘の経験も武器も持たない者など、どれほど束になつても怖くはありませんよ。農耕具や、刃物ですら山鉈程度でした」

「そうか……」

「もうよろしいですか？ 済んだことは仕方が無いとはいえ、ここにいるのはやはり心苦しい」

アカシアに背を向け、ルイーグが倉庫の扉に手を掛けた時だった。

「ふざけるな……それが気高きアリシルの老兵か」

その声の怒張にカルルは竦んでしまった。

「ほう……なにか失礼でもありましたかな」

「ここにいる子供は全員、そなたらの槍で殺されている。山鉈や農具でこの特有の傷痕はあり得ない」

「……」

ルイーグは何も答えず扉を開け、一人が外に出るのを待つた。

それ以外に選択が無く倉庫を出ると、距離を置いて兵士に囲まれていた。

「私とて、かの英雄殿と事を荒げたくはないのです。……わかつて

いただけますかな？」

微笑むルイーグは懐から拳ほどの中く膨らんだ皮袋を取り出し、近づいてきた。

「あの子供たちは、この村の者によつて不運にも殺されてしまった。そうですね？」

「ああ、はつきりしたよ」

「それはそれは。良かつた」

「切り捨てなければならないアリシルの恥部を見つけることができたのだ。こんなに喜ばしいことはない」

その言葉に場の空気が凍りつく。

ルイーグが「おい」と言つと、微動だにしなかつた兵士達が一斉に槍を構えた。

「貴女方に……救済の余地はないようだ」

「そうか。もとより追われる身なのでな。カル、私のそばを離れるな」

それからカルルには何が起つているのかわからない時間がしばらく続いた。

突き出される槍の先端が見えたかと思えば、すでにその切つ先は切り落とされて地面に刺さつていて、足を払われたと思えば頭上を槍の穂先が真横に難いでいたり。避けるどころか、本当にアカシアのそばに付いているだけで精一杯だった。

そして気がつけば、立つて槍を構えているのもあと三人にまで減つていた。

兵士は均等に距離を取つて三方向からこちらを囲み、一撃を繰り出す隙を狙つている。

対するアカシアは、肩で呼吸をしながら常に周囲を牽制している。その顔色には余裕が感じられず、もはや気迫だけで立つているように見えた。

アカシア自身だけならともかく、自分に向けての攻撃も数え切れないと防いでいたのだ。そんな戦い方をして疲れないわけがない。

傍らでカルルは自らの無力さに歯を喰いしばることしかできなかつた。

せめてもの騎士道

戦神アカシア。

どうせ戦意高揚を図つた英雄の与太話、そう思つていた。

実際にはそこそこ腕が立つ程度で、すぐにボロが出て力尽きたと踏んでいたのは自分だけではないはず。それこそ、端から見ればただの小娘に鎧が付いた程度なのだから。

しかしこれはどういうことか。

手練れが槍で囲んでいたにも関わらず、未だに突くどころか穂先を掠めることすら出来ずにある。

「 しゃあらつ！」

一人が死角から仕掛けたはずの一撃も、体が躱してから首がそちらを振りむくのだ。もはや後ろに目が付いているとしか考えられない。こんな奴は軍格闘術の師範にだつてているようなものではない。（騎士道精神に乗つ取りたいとこだけな……。まず勝たなきやいけないもんなあ。ルイーグ隊長なんて見てるだけだしよ……）

時には不合理なほど徹底した騎士道を貫き、大陸に名を轟かせる騎士に憧れていた。しかしどうとう自分はなり損ねたらしい。

「マルザ、エルム。噴流嵐攻撃だ」

「了解。じゃ、あつしが二の手でいいですか？ バラル副隊長」「了解。このエルムが三の手を務めさせて頂きます」

噴流嵐攻撃とは名前こそ派手だが、要するに打ち合わせがされた連携技である。その時の位置関係で担う役割が決まるのが特徴であり、生き残っているのが小隊の中でも鍛度の高いこの二人で助かつた。

それにアカシアは小娘まで守つていてくれたおかげでかなり消耗している。これなら肩の上下で呼吸を読むことも容易い。

女騎士が長い息を吐き、また吸い始める その刹那を狙う。

バラルはアカシアを、マルザはローブの娘を狙つて穂先を突き出

した。

正面から仕掛けた一の手、バラルの槍はやはり見切られ、剣で軌道を逸らされた。そこにマルザが一の手を加えて守りを崩す算段だが、今回はロープの娘でアカシアの手を煩わせる。

「カルルつ、どけ！」

予想通りアカシアは小娘を庇つた。槍を剣で躱しながら素晴らしい身のこなしで回し蹴りの要領で小娘を蹴り飛ばし、マルザの一閃から守つたのだ。やり方は強引だが感嘆の息が漏れそうになる。

しかしこれは決闘ではない。ただの殺し合いだ。

連撃を防いで態勢を崩したアカシアに必殺の一撃を叩き込むエルムが三手目に控えている。

（さあエルム　お前の鍛度なら容易いだろう？）

しかし、その瞬間は訪れなかつた。

「つ……」

バラルが目をむけた時、エルムは明らかに混乱していた。槍を突き出す瞬間のために全神経をアカシアへ集中させていたのだ。そんな彼の目の前に蹴飛ばされた小娘が転がってきて彼の集中をかき乱し、判断を数瞬遅らせた。

ここまで狙つてやつたのだとすれば末恐ろしい娘だ。

「　　つ、せああ！」

気持ちは分かる。が、もう　間に合わないだろう。

体勢を立て直したアカシアはその一閃の突きを紙一重で躱し、代わりに長剣を振り抜いた。

頭と胴の甲冑の隙間、首を確かに刃が通過したのを見た。

（エルム……つ！）

ここで雄叫びの一つでも上げながらこの槍をアカシアに突き出せるのなら、バラルは死神に魂をくれてやつてもいいと思つた。

（畜生つ……）

それすら叶わないのはこの一度突きだした穂先を引き戻さなくてはならず、その隙が命取りになるからだ。それはマルザも同じで、

もう間に合わないことくらい本人もわかつていいるはずだ。

ほら、英雄様がもう剣を振り上げてる。エルムの次はマルザだ。なら俺はあと一発くらいはかませるか。……エルム、マルザ。散つていった部下よ。

地獄に落ちても皆でまた馬鹿をやろつ。

二人目の兵士も膝を折った。残るは自分のみ。目に映る騎士の背景には動かなくなつた部下たちが横たわつている。

皆、いい奴らだった。

そしてすまない。最後の最期、自分はお前たちの仇よりも別のものを優先しようとしている。

やはりこれだけは許せなかつた。

死を前にし、英雄を目指していたころの自分に後ろめたい気持ちを残したままになるのが怖くなつた。

相手が誰であれ 脳に落ちないことには全力で抗わなければ人間は腐つてしまう。

賄賂を断つた若き騎士が、それを思い出させてくれた。

「おおおおおっ！」

「くつ！」

避けられない攻撃なら刺し違えるまで、と決死の表情を浮かべ剣を構える騎士に胸中で礼を言い、体を反転させる。

残りの人生すべての気力を籠めた、アリシル旗下第一特務ルイーグ隊副隊長、バラルの一投。

最期の槍に相応しい相手をめがけ、槍は投げられた。

「

その槍の穂先が先ほどアカシアによつて切り落とされていなかつたなら。重心の位置が狂つていなかつたなら……確実にそれは心の臓を穿つていたに違ひない。

投げられた槍は、折れなかつたことが奇跡に思えるほど深く深く標的の背後の壁に突き刺さつていた。

「てめえが死ねば……よかつたんだよ……つ、クソ外道が……！」

あの世にてめえの居場所が

あると思うな……よ…………」

投げた直後にアカシアの長剣を受けたバラルは倒れ、その顔は最期までルイーグを睨みつけたままだった。

腰を抜かして無様にしりもちを着くルイーグの背後では、激しく壁に突き刺さった槍がまだ残響に震えていたのだった。

ソードプレイカー

「さあ、貴様で……最後だな」

剣をルイーグに向けてアカシアは声を振り絞つた。

彼女の体力が限界に近いのはカルルの目にも明らかであり、それはルイーグとて同じだった。

「ふ、ふん。今の貴様に何ができる？ 確かに……部下をやつたのは見事だ。だがこれで最期なのは、お前のほうだらう？」

「…………」

剣をしきりに握り直しているのはもう手の感覚すら危いのかもしない。

「アカシアさん……」

情けない。自分には励ますことしかできないのか？

この人は女性だぞ？

大して年の変わらない男の自分が守られてどうする？
俺は……。

その時、がくりとアカシアが膝を着き、剣を落とした。
地面上に手を着き、苦しそうな呼吸と歪む横顔。

「アカシアさん！？ だ、……」

大丈夫ですか、などと言えるわけがなかつた。どう見ても大丈夫ではない。それに彼女がここまで苦しむことになつたのは自分に責任があるのだ。

しつかりして下さい、頑張つて下さい。

そんなこと、情けなくて口が裂けても言えるものか。

「どけ、小娘。貴様に用はない。だが邪魔をするといふのなら貴様も殺す。 どけ」

ルイーグがすぐそこまで迫つていた。剣先を向けて冷徹な笑みを浮かべる男に返す言葉はない。

だが、隣で跪いている女性にはこんなことを口走つていた。

「アカシアさん。……あなたの言つていたことが分かつた気がします」

恐怖心はとっくに振りきれていた。自分がやらなければならぬ時が来たのだ。

逃げることがこんなに恐いだなんて。

「……？ カルル、下がつていろ」

アカシアはなんとか立ち上がりうと踏ん張るが、やはり立てない。体が言うことを聞いてくれないのだ。

さつき最後の兵士を倒した瞬間に安堵してしまったことで疲労感が一気に押し寄せてきた。これは自らの未熟さに他ならないが、そのせいでカルルまで死なせてしまうのは堪えられないことだ。

「……やる気か？ 小娘」

しかしカルルはそんなアカシアの思いとは裏腹にルイーグに立ち向かおうとしている。

アカシアや自分のためだけではない。彼らの手に掛けられた奴隸の子供の命はカルルにとつて無視できる重さではなく、せめてもの手向けだ。この男だけは生かしておけない。

「そうだ。お前を……殺してやる。罪を数えろ」

ルイーグの眉間に皺が集まる。無言で振り上げられた長剣をカルルは雲でも眺めるようにじっと見上げていた。

「死ねいつ！」

振り上げた位置から真っ直ぐにカルル目掛けて剣が振り下ろされる。

「カルルっ！」

アカシアが叫んだのが聞こえた。

直後、カルルの真横で空振りしたルイーグがつんのめっていた。

「…………つ！？」

カルルの口元が吊り上がる。

よかつた。

困惑するルイーグの表情にカルルは確信を得た。

自分も戦うことができる。

「この…… 小娘があつ！！」

今度は斜めに難いでくる。

ルイーグが剣の切つ先が届く前にカルルは後ろへ飛んでいた。見える。

槍の時は慣れない前後の動きに対応できず、結局アカシアの足を引っ張ってしまった。

だが、その時からもしかしたらという気はしていた。

ある日は寒空の木の落ち枝で。またある時は家畜を従えるための皮の鞭で。

一度でも避けよつものなら、百回悲鳴を上げるまで叩き続けられる。

痛いのが嫌だから、知らず知らずのうちにあまり痛くない箇所をわざと打たせるようになっていた。

その頃にはもう、相手の目線や体の動きから事前に見切ることを体得していた。

「カルル……」

そのカルルの反応と動きにはアカシアですら戸惑っていた。

「どうということだ……！」

同じように何度も何度も。

相手がどう斬つてくるのかがわかる。
わかれれば、避けられる。

感情にまかせて大振りな攻撃を繰り返し続けた結果、ルイーグにも焦りと疲れの色が見え始めていた。

「小娘、貴様……何者だ！？」

唾を飛ばすルイーグを睨み続けたまま、カルルは懷からある物を取り出した。

「俺は……臆病者だよ。それでも、いつかは勇者になつて大事な人を守るんだ。あと、俺は男だクソジジイ」

「なつ……」

アカシアから受け取った短剣を抜き払うと言い捨てた。

「今からアンタをぶつ殺すって言つたんだよ。村の人間はともかく……あの子供達を殺したお前は絶対に許さない！」

「ぬうう……！ 生意気な……つ、やれるものならやつてみろ！」

飛び掛つてくる男に、以前カルルを痛めつけ弄んだ者たちの記憶が重なる。

一度でいいから、思いきり刃向つてみたかった。

「死いねええつ！」

「うるさいんだよ……！」

振り下ろしてくるルイーグに対し、カルルは下から切り上げる。斜めに落ちてくる長剣の軌道を見切り、こちらの短剣の軌道をそれに合流させる。

それは正面から受け止めるのではなく、あくまで掠らせる程度の接触を狙う。そうすれば小さな軽い短剣でも、長剣の軌道を体から逸らすくらいのことは容易いとだろうと咄嗟の反応だった。

「馬鹿なつ……」

言葉はそれが最後だった。

その時にはすでに大振りを外されてよろけたルイーグの脇腹に、カルルの短剣が深く突き刺さっていた。

声にならない断末魔のあと、男は倒れ、そして動かなくなつた。

男の服で短剣を拭うと、その櫛状の刃を見つめた。

もう汚れは付いていない。借りものなのだから綺麗にして返さなくては、と無意識の行動だつた。

だが、人の命を奪つたようなモノを返されて持ち主は何と思うだろ？ それに気づいて、馬鹿らしくなつた。

「すみません」

ようやく立ち上がったアカシアにそれだけ言い、黙つた。否、彼女の言葉を待つた。

人を殺した。その受け入れ方について彼女の答えに従おうと思つた。

「……カルル」

拒絶か。

軽蔑か。

恐怖か。

それとも、何だろうか。

「よかつた……」

抱き留められた。

いくら考えてもそうなる理由はわからなかつた。

それでも、もう少しこの温もりに身を任せていたいと感じた。

「けがはないか？ 大丈夫か？」

「……けがはありません、大丈夫です」

「そつか……よかつた。……では、早くここを出発しよう。王都の追手もだが、この場を誰かに見られるのは避けたい」

するりと背中に回つていたアカシアの手が離れた。

それでも、彼女が歩き出した後もしばらくその感触と残り香は力

ルルの胸の内を温かく満たしていくくれた。

ソードフレイカー（後書き）

物語の中に出でてくるキャラクターたちのイメージをよりはつきりと決めようと思つて最近そういう絵を描き始めました。

……でもこれがまた難しいものですね。時間をかけてなんとか描き上げても「……誰だおまえ」てな感じで。

それでも自分で作ったお話に自分で挿絵を付けられるようになつたら素敵だと思うんですね。友人には「人はそれを漫画家と呼ぶのだ」と突っ込まれましたが。

とまあ、そんなことをやつてるから本編の更新がスローになつてしまふのですが。最低でも一週間に一度の更新を守つていきたいと思う次第であります。

さらば因縁、吹けよ風

「お前……ビゲスのとこのカルルか？」
（くわ）
轡を外された男の第一声。

カルルの記憶が間違つていなければ、この人物は以前カルルを使役していた禿げ頭の友人である。

敬語を使うことにつまらないはなかつた。むしろ、この人は自分の
ような者達に良くしてくれていたほうだ。

「やつぱりか……。顔を見た時、まさかと思つたんだ。……、ビゲ
ヌは お前が？」

「う」

そう呴いたあと、男は激しく地面に拳を打ちつけた。

「いいいー」とになるから……！
俺は奴隸つてのが嫌だつた

卷之三

急に立ち上がりてガル川を眺み一へると
歯が砕けそよなほど鳴
いしぶつた。

「言わせてくれ。俺は……お前が憎い。殺したいほどだ。親友を殺されたんだ」

.....」

言葉が出ない。何か自分にも言いたいことがあるはずなのに。この人の目を見ているとそれがわからなくなってしまう。

「アーヴィングの『死んだ娘の手紙』は、

「俺は……お前の事情も知ってる。無理やり連れてこられて、あん

いたさ。なら……仕方ねえじゃんかよ」
その言葉にカルルは男の心情を察した。

「俺はお前が憎い。が……それとは別に、せめてこれからは幸せになつてほしいとも思つてるんだ。矛盾してるだろ。自分でもよくわからねえんだ。……笑つちまうよな」

下を向いて笑いながら、地面に水滴の跡が浮かんでいく。自分が他の子供たちの仇を討ちたいと憤つたのと変わらない。この手で首を絞めて命を奪つたのは、自分にとつて最悪の人間であり、そしてまた彼の親友だつたのだ。

この人の苦悩を解決することはおそらく誰にもできない。「カルル……俺がこれ以上、おかしな考えを起こす前に……消えてくれ」

「はい……お元氣で」

自分にできる最善の行動は、余計なことは言わず立ち去ること。そう悟るしかなかつた。

「達者でな。カルル」

軽く会釈をし、その場から離れた。

カルルとアカシアが自分たちの荷馬車まで戻り、手綱を打とうとした瞬間だった。

彼が息を切らして追いかけてきた。

「カルルー！ 村の西広場、あいつらの馬車に、子供がひとり乗せられてる！ こんな村からは一緒に連れ出してやつてくれ！」

きょとんとしてからカルルは手を振つて返した。

「……はい！ あなたもお気をつけて！」

彼はこれからどうするのだろうか。村は壊滅し、最後の生き残りとしてどう生きていくのだろう。

親友の仇を見送る彼の胸中など、カルルにすべて察することなどできるはずもなかつた。

ただ、もう後ろをふり返らないことだけを決め、彼の最後の頼みを叶えるため村の西側にあるもうひとつの大広場を目指した。

「なつ……」

それを見てアカシアが驚愕したのも無理はない。開いた口が塞がらないとはこういうことだ。

それを初めて見た時はカルルさえそうだつたのだから。

「……倉庫の中には居なかつたから、きっとその最後の一人つていのはコイツのことだらうとは思つてたんです」

「まさか……いや話には聞いていたが、信じられん。本物か？」

馬三頭で引く大きな屋根付きの馬車の中には、後ろ手に縛られて目隠しをされた子供が乗せられていた。

それはまるで収穫を迎えた小麦の穂のよう。黃金色の髪の隙間からちょこんと生えているのは獸の耳。成金趣味の贅沢な腰帯にしか見えない尻尾からも、同じ色の毛を生やしている。

「獸人……」

それだけ呴いたアカシアの隣をすり抜けて荷台へあがると、その少女に近づいた。

「ええ。獸人は希少ですからね。奴隸を商品として扱う奴らがついでに取引を持ちかけていくんですよ。物好きで欲しがる金持ちは多いらしくて」

感情の籠らない声でそう説明し、カルルは少女の目隠しを取った。

「カルにいちゃん！」

手を縛っていた縄を解くと弾けるように抱き着かれた、というよはしがみ着かれた。

おいおいと泣きすがる少女にアカシアが、

「……にいちゃん？ 兄妹なのか？」

と二人の顔を見比べて言つたのでカルルは笑つた。

「違いますよ。僕たちみたいな子供の中じや自分が一番年上だつたんで……教育係みたいなことをさせられてたんですね」

そう言いながら涙と鼻水を塗りつけてくる頭を乱暴に離した。

「ぐすつ……にいちゃん。みんなが、みんなが……」

「言わなくていい。……もう大丈夫だから。お前は？ けがとかし

てないか？」

ふるふると首を振つた少女を立ち上がらせると荷台から降りるのを手伝い、周囲を見渡した。

「このまま出発して、大丈夫ですかね……」

焼け落ちて骨組みだけになつた家、瓦礫のように転がる人間。アカシアの目からすればさながら戦火の略奪にあつたのと変わらない惨状だった。

「仕方ないさ。ルイーグ隊、そして人買いとはいへ村を潰した。罪

状がひとつふたつ増えたところで追われる身なのは変わらない

「いえ……そういうことじゃないんです」

「ん？」

「この村の人間はともかく……倉庫の子供たちはなんにも悪くないのに殺されて。せめて……」

カルルの言わんとすることを察したアカシアが先に言った。

「それはそうだ。……だが、残念だが墓を建てて弔つてやるだけの時間の余裕はないのだ。わかってくれ」

「……はい……。……行くよ、メーネ」

自分たちの荷馬車に乗り込むとカルルは手綱を握った。

村から草原に出る道を進みながら、痛々しい破壊の限りを尽くされた景色にかつての風景を重ねていた。

（あんなにいっぱい、人がいたのに……）

通りの端に倒れている者や井戸に上半身を突っ込んでいる者、折り重なるようにして倒れている者。その中に身動きするものは居ない。

「……先代の王が戦死してから、アリシルは腐敗の一途だ。ルイーグもアリシル王が健在のころはここまで表立つたことはしなかつたはずだ。これから同じような奴がまた出てくるだろう。……あの王子では、どうにもできないだろうな」

「そんな状況で……僕たちは大丈夫でしょうか」

思いのほかカルルが不安がつたのを見て、アカシアは補足した。

「なに、他国の領土に入つてしまえばそう簡単には迫つてこれない。もしそれでも追手が掛かることがあるとすれば、よほど国同士が友好的か利害が一致している場合だろう。……まあ、隣国とはいえローデリアとアリシルは昔から疎遠な仲だ。ローデリアがわざわざ面倒事を引き受けることはないだろ?」

「……そうですか」

地獄と化した村の出口がようやく見えてきた。

ハロッサの門を過ぎると田の前はまた草原になる。ここから見渡せる場所に町や村の小さな影はいくつか見えるが、王都から逃げることを考えると次の目的地は決まってくる。

「次はあそこだな。ここからだとちょうど田が沈む方角だ」

そう言つてアカシアが指差した先には一際大きな町の影があつた。カルルも話くらいは耳にしたことがあるのでそこが何かは知つている。

「あそこを超えたら、ローデリアなんですね?」

「そつ、国境の街ケルン。あの町の中にある国境を越えればこちらの勝ちだ」

ハロッサもそうだが、町や村から草原に出る道は木の枝のように分岐していることが多い。次の町の名前と矢印の記された立て札を頼りにそこから目的地に向かつて伸びるものを見るのでだ。

「この距離だと一日、つてところかな……」

ぱつりとカルルが呟くと、メーネが背後の荷台から御者台に移ってきた。

「ねえ、こいちゃん? どうしてそんなカツコウしてるの?..」

「ん? 「あ

どうりでやけに下半身の風通しが良いわけである。

「いいじゃないか、良く似合つているのだし」

思い出したように居心地が悪くなつて着替え始めたカルルにアカシアが残念そうな声を上げた。

「そういうわけにはいきません。それに、この服は町に着いたらア

カシアさんが着るんでしょう？ その格好じゃダメですよ。なんでも

アリシルの軍人がこんなところに居るんだ つて。国境を越えるなら『普通の人』にならないと

「仕方ないのか……くそー」

「くそー、じゃないですよ。それと、メーネ」

「なに？ にいちゃん」

「その、にいちゃんつていうはやめてくれないか

「どうして？」

丸い瞳にカルルが大きく映り込んで畳りひとつない眼差しが返つてくる。

「どうしてつて……そもそもだな、どうして俺のことを兄ちゃんなんて呼ぶんだ？ そりゃあ面倒を見たのは俺だが、メーネより年が上の奴は他にも居ただろ？」

「だつて……」

「だつてじゃない。とにかく『にいちゃん』はやめる。いいか？」

「……じゃあ、にいちゃんのことなんて呼んだらいいの？」

「……カルルでいい」

「カル、ル……」

「そう。次からはそう呼ぶことな

「 カルル」

アカシアの声だった。

「はい？」

「あまりいじめてやるな。大してこだわることでもないだろ？
呼び方くらい好きにさせれば」

メーネの頭を優しく撫でながらアカシアはそう言った。まるで妹をいじめた兄が母親に叱られている構図だ。

「…………」

どうも腑に落ちず唇を尖らせると、アカシアにそう言わると押し通す氣も萎えてしまった。

「…………わかったよ」

と観念した。

「ありがとう、ここちゃん！」

ぱあっと輝く笑顔でそう言わると恥ずかしくなつて田を逸らしてしまつ。この感覚が好きになれなくてやめてほしかったのだ。

「……お兄、ちゃん」

「んなつ

「冗談だ」

「……勘弁してくれ」

その日は背後のハロッサが手のひらに収まるくらいの距離まで来たところで日が落ち始め、荷馬車は止まつた。

夕焼けでまだ空は明るいが、そろそろ野宿の準備を始めなければあつという間に暗くなつて面倒なことになつてしまつ。

「明るいうちに出来ることはしておこう。まず一番に火、あと荷台には覆いの布を掛けておくんだ。食糧のにおいが災いを呼ぶことはざらだからな。夜露や雨よけにもなる」

アカシアがきべきと指示を出す中、カルルは荷台で眠りこけているメーネを起こすとして止められた。

「そつとしておいてやれ。ずっと怖い田に遭つてたんだもん」

「……そうですね」

田隠しと縄で縛られていた状況を思い出せば、さすがにこの安心しきつた寝顔を覚まさせようという気は起きなかつた。

そつと一番分厚い毛布を掛けてやり、アカシアと一緒に火を囲む。

「……今夜は雲が多いな。月が隠れると昨日の今日でも明るさがだいぶ違う」

追われている身とは思えないくらい暢気にそつアカシアがカルルは羨ましかつた。

「そうですね……」

自分はと言えば、ルイーグを刺した時の光景が稻光のように頭に浮かんでは頭から消えてくれない。とてもアカシアのよつて雲の量を気にする余裕はなかつた。

ずっとこのままなのだろうか。

言い表せない不安がカルルを静かに蝕んでいた。

「昼間のことを気にしているのか？」

はつとして焚火の炎から視線をアカシアにむけた。それが顔色に出ていたのだと初めて気が付いた。

「……はい」

カルルが頷くとアカシアは少し考えた後、口を開いた。

「そうだな……お前にすこし、説教をしてやるうと思つ

「説教？」

予想外な単語に思わず聞き返すと、アカシアは「酒はあるか」と

聞いた。

「……暖を取るための酒なら、少しほ」

「それでいい、くれ。　ああ、カル。　お前も飲め

「いえ、僕は……」

「飲めよ」

有無を言わさぬ態度に仕方なく、木のコップを一つ出した。

そして驚いたことに、一口を含んだ直後にはもうアカシアの頬が紅潮していた。

「あの、お酒……弱いんですか？」

「ん。ああ、そうかもな……。いや、そんなことはいい。せつきよ

うだ、説教」

「は、はい」

改まつて佇まいを直したカルルにアカシアは目を細めてコップを振つた。

「いいか。私が酒を飲むのは素面で話すようなことじやないからだ。^{じゆふ}

聞くのも同じだ。飲め

「……」

そういえば酒など一度も飲んだことが無かつたのを、カルルは喉を焼かれてから思い出したのだった。

「…………つ……」

「くす。それでいい」

アカシアは肩を揺らして笑っていた。

「いまからするのは価値観、モノの考え方の話だ。」
「なんこと、酒と一緒に話半分に聞くくらいがちょうどいいだらうへ。」

「……なんの……話ですつて？」

水の入った皮袋から口を離すとようやく言葉を発した。

「カル、お前……ルイ グのことを後悔しているな？」

「

いきなり核心を突かれ、言葉に詰まる。

「だがそれでいいんだ。お前は間違っていないよ」

「え……？」

「くい、とコップを傾けてから漏れた短い吐息には、カルルが思うよりも遙かに大人びた雰囲気が満ちていた。

「……その罪悪の阿責に問われることすら忘れてしまう者もいるのだから。私みたいに、な」

その乾いた笑い声はカルルには真似のできないものだった。

「アカシアさんは」

「ん」

「……なんとも思わないんですか？」

アカシアの昼間の戦いぶりを見ると、彼女は人を斬ることに関して何の感情も抱いていないようだつた。ただ相手が襲つてくるから払う、というふうに。

「まるで雑草でも払うみたいに。……僕にはそう見えました」
「雑草か、巧いな。……そうだ。鬱陶しい雑草は、鉈で払えばいい」

「……」

「初めてが　一一番辛かつた」

「え？」

空になつたコップを脇に置くと、アカシアは胡坐から片膝を立て座り直した。その瞳には焚き火の炎が揺らめいている。じつと炎を見つめたまま、思い出すようにその口が動く。

「戦場^{いくさば}に出て、相手が私を殺そうとしているのを肌で感じたから、怖かつた。死ぬのは想像ができないから、本当に怖かつたよ」

運命の悪戯と偶然が重なった、初めて戦場で相手を殺した記憶が蘇る。

胸に深々と刺さった剣を、震える手が握っている。それが自分の手だと信じたくなかった。

「一回目は その半分だつた」

その時は復讐^{ふくしゆ}に駆られて、大好きだった友の仇を討てるなら、自分はどうなろうと知らない。だから初めから殺すつもりで相手に切り掛けた。その時の自分はまるで獣か人外の何かだつた。

「最初と一回目でも、やつたあととの受け止め方が全然違つた。一回目の時は、『ああ、またやつてしまつた』と。立ち直るのがだいぶ早かつた」

今まで幾度と喉に引っかかるっていた言葉が、ついにカルルの口から出した。

「……僕も、二人目です」「ああ、らしいな」「え？」

驚いてアカシアの顔を見た。深い闇の中までも見通せそうな妖しい翡翠の瞳がこちらを覗いている。

「昼間、そんな話をしていたろう?」

「あ……」

そういうえば、ハロッサの最後の一人がアカシアの前でそのことを口にしていた。

「ビゲス……と言つたか。お前の雇い主か?」

「……ええ。そうです」

「それも後悔しているのか?」

「……」

わからなかつた。

ビゲスが酔つて馬小屋にやつてきたあの時、もし何もしていなか

つたら、村を逃げ出していなかつたなら。

間違いなく、自分はルイーグ隊によつて殺されていた。

それに、ビゲス本人に対しての憎悪もかなりあつた。客観的に考
えてもあれ以外の選択は無かつたはずだ。

「たとえ間違つたことでも……。たとえやり直すことが出来たとし
ても……僕は同じことをすると思います」

そうするしかなかつた。

それでも、やはり間違つているんじやないか、罪を償わなくては
いけないんじやないか、そんな決着の付かない葛藤を続けていた。
だからアカシアにお前は間違つていないと言われて救われた気がし
たのだ。

「死ぬほど思い詰めるも、雑草を刈るも、それはお前次第だ。カル
ル

「……はい」

「もしお前が間違つていて。その結果として周囲が敵だらけになつ
たとしても。私だけはなにがあつても味方でいてやる。それを忘れ
るな」

酔つているからだらうが、これほど歯の浮く台詞をよくも面と向
かつて並べてくれる。

それでも。

「ありがとう……」「さいます」

こんなにも体が暖かい。嫌なものが氷のよつに溶けてどこかへ流
れて出ていつてしまつたかのようだ。

「……カルルは泣き上戸だつたのだな」

ぽりぽろと膝にこぼれる涙が止まらない。もううん、酒のせいな
どではない。

「……もう眠るといい。明日も早いからな。ゆっくり眠れば、気持
ちも落ち着く」

優しい声にカルルは涙を拭うと、「おやすみなさい」と残して荷
台に上つた。

すやすやと寝息を立てるメーネの邪魔にならないよう体を端に寄せ、毛布から顔だけ出して曇つた夜空を見上げた。涙で詰まった鼻を冷たい夜風が抜けていった。

しばらくは焚き火の燃える音とアカシアの気配を聞きながら、メーネの頭を撫でていた。気が落ち着いて眠くなるまでそう時間はからなかつた。

わいば因縁、吹けよ風（後書き）

小説というか物語を描いてみると、自分が創造したキャラクターに教えられることがあります。

自分がタイピングしているはずのセリフや思想に、なるほど……つて感心してしまうことが一作品に一つ二つほどあるのです。それがこの作品でどのくらいあったかは忘れてしましたが。なにぶんこれを書き上げたのはもう一年も前になりますから。

あらすじはこのへんまでですけども。物語はむじかひからが本番
つス

頭上の鳥

とても恐ろしい夢を見た。

内容は思い出せない。汗ばんだ額を拭つた。

自分が何か取り返しのつかないことをしてしまい、追いかけてくる恐怖からひたすら逃げ続けるという夢だった。

あと一步で恐怖に肩を掴まるる というところで救いの手がどこからともなく差し伸べられ、その誰かの手の温もりにいつしか恐怖は消えていた。

「…………

カルルが半身を起こすと、自分とメーネとの間に毛布が一枚余分に敷かれていた。

そこにさつきまでアカシアが寝ていたのだと気付くのにそう時間はかかるなかつたが、その本人はどこへ行つたのだろうか。

「 ん、最後はメーネか。カルも飲むか？」

荷台の外から声がし、見ればアカシアが火を起こして何かをしている。芳ばしい匂いが湯気とともに鼻腔をくすぐり、どうやら珈琲を淹れているようだ。

「 昨夜の火種がまだ残つていてな。道具だけはいつも持ち歩くようにしているのだ」

彼女の荷物がやけに多いのはそのせいだつたらしい。見慣れない形の真鍮の鍋に三脚、粉末に挽いた珈琲豆が詰まつたガラスの瓶。それらを見る限りでもかなりのこだわりを感じられる。

「 いただきます……

渡されたカツプの温もりがじんわりと手に優しい。そういうえば随分と久しい嗜好品だ。

一口啜り、その味に思わず目を見開いた。

「 ……甘い！ 砂糖が入ってるんですか？」

「 私は苦いのはてんでダメでな。そのほうが美味しいだろ？」

「でも砂糖つて……すごく高いでしょ？」

本当に飲んでも良かつたのかと疑うほどだ。

少なくとも砂糖は一介の騎士が給金で買うには高すぎる代物である。それに高価な砂糖は蜂蜜のように甘味料としてではなく、万病に効く薬としての認識のほうが強い。珈琲に混ぜるなど富裕層にしか許されない飲み方だ。

「なに、出てくる前に屯所から失敬したものだから心配するな。それに甘いものは頭が冴える。歯を磨かなくてはならないのが難点だが」

「そう……ですね」

アカシアの話をまとも聞いていられないほどに砂糖入りの珈琲は美味かつた。

「……そろそろ夜が明けるな」

日の出前のまだ薄暗い時間が、白み始めた東の空に田をやると不思議な光景を見ることができる。

限りなく黒に近い深緑色の大地の向こうから、細い陽光の筋が空に打ち上げられ始めた。

太陽が完全に地平線から顔を出すまでの短い時間、草原の陽の光を浴びている部分が金色に輝いて見える現象が起こる。

それを草原に住む者は「大地の目覚め」と呼ぶ。

まるで太陽から風が吹くように金色の光が彼方から草原を染め上げていき、その神々しいまでの美しさに息を呑むのは、見慣れた力ルルとて変わらない。

「……綺麗だつたな」

「はい。ほんとに一瞬ですもんね」

一言二言を交わしている間も無くそれは終わった。

名残惜しく草原を見渡しても、そこにはもう朝の青空の下に映える緑色が一面に広がっているだけだ。あの闇の中を広がる金色の時間は、見間違ひだったのかと思つほどに儂い。

「諸説は色々とあるのだがな。朝靄に陽光が反射するせいだとか、

しゃせつ

精霊の仕業だとか。 もつとも、眞実がわかるのはまだずっと先なのだろう。 そう、私は思うよ」

そう言つて地平の彼方を見据えた騎士は、自分の知らない時間で何を見てきたのだろうか。

遠い。

そう感じざるを得ない。

「なあ、カルル？」

「はい？」

「長い時間会わなかつた。今私はカルルからどんなふうに見えているのか察することができない。私は……変わつたのかな」

それはどうでもいい話をしているふうではなかつた。ただ、真剣というにはその目はあまりにも穏やか過ぎた。

自分に向けられた双眸には曖昧な返事も、その場しのぎの綺麗言も彼女を傷つけてしまうだらう。

カルルが幼き日を思い返せば、知らず内に口調も当時のものへと戻つた。

「……七年も前のある頃としか比べられないのは仕方ないけど、確かに君は変わつた。……それに俺も変わつてしまつたから。それはもうどうしようもないことじやないか。だからさ、それは悲しむんじやなくて、良い意味で受け入れてしまえばいいと思つ」

その言葉を噛み締めるように視線を落とし、ややあつてからアカシアは口を開いた。

「……そつか。カルがそう言つのなら、きっとそなんだらう。……すまない、おかしなことを聞いて」

「いや。相談に乗るくらいしか……僕にできる」とはありませんから

そう言つとアカシアは少し不満そうな顔をして、カルルも気がついた。

「あ……」

「今の話し方でよかつたのに」

「……すこません」

「せひ」

「……」

今まで喋る時には敬語しか許されなかつた生活のせいで、すつかりそれが癖になつてしまつていた。

メーネのような例外もあるが、大抵の相手には意識しなければつい敬語で話してしまつ。

礼儀正しいと言えばそれまでだが、それでも度が過ぎてこるのは確かだ。

「……いつかは治せよ?」

「は……ああ、わか……つた」

やれやれ、とため息を吐くとアカシアはコーヒーの道具を片付け始め、それを見てカルルもそろそろ メーネを起しやつと荷台にようじ登つた。

「メーネ」

「……」

「起きる」

尻尾だけがぱたりと動いたが、起きる気配はなかつた。

「メーネ」

声を強くして呼ぶ。今度はふたふたの獣の耳がぴくっと撥ねた。

「ん、んんん~」

眩しそうに目を擦りながら仰向けになつ、よつやかへ言葉を発した。

「……にこちゃんおはよう」

「おはよう。ほら、顔を拭け」

ひからまで眠くなつてきそつな顔に、水を含ませたタオルを渡してやる。

「……?」

その意味が分からぬのか、渡されたそれをぼーっと眺めていたので、結局取り返してカルルが拭いてやつた。

「つたく、毎間の元氣を少しでもこっちにまわして欲しいもんだ」

朝が弱いメーネの世話をせられていた頃もよくこうして顔を洗つてやつたものだ。

「カルルよ」

焚火の始末を終えたアカシアが荷台に荷物を乗せてよじ登つてき
た。

「とりあえず早いうちに出ておこう。朝飯は道すがらでも食べられ
るからな。多少あわただしくてもケルンに着くのは早いほうが多い
」「そうですね。じゃあ、先に出発だけでもしましょうか」

草を食んでいた荷馬が出発の気配を感じたのか食事を止め、カル
ルは足元の水桶を脇に抱えて「行くよ」とだけ言って顔を撫でてや
つた。

手綱を軽く振つてやるだけで荷馬車はゆっくりと動き始めた。朝
の冷たくも清々しい空気を胸に吸い込み、大きな欠伸と共にまた一
日が始まったのだった。

「もううつ、触らないでつて！」

「む……よいではないか。少しだけ、な？」

背後のやり取りに耳を傾けて笑っていたのも最初だけだ。

太陽が真上に来てもまだ諦めないアカシアと、耳と尻尾を触られ
ないよう守り続けるメーネの攻防戦。

人のそれよりかなり上に付いている尖ったふさふさの耳。服の裾
からはみ出した腰巻のような尻尾。それらが本当に体の一部として
機能しているのを見たアカシアが、触らせてくれと言い出したのが
発端だった。

「や、ちょっと……にいちゃん、たすけて！」

肩に衝撃を受けて振り向くとメーネの顔があつた。その後ろには

アカシアが。

「だから少しだけだと言つてているではないか。減るものでもないの
だし。ほらほら」

「」の人もいじわるする！ メーネ嫌だつて言つてゐるのに や、やあああああ！」

「素晴らしい……！ これが獣人の尻尾か、なんといつ心地良い肌触りだ。そこいらの毛皮とは比べ物にならん！」

「さ、触らないでえ……！」

へなへなと腰砕けになるメーネに襟首をひっぱられ、ようやくカルルが止めに入つたのだった。

「アカシアさん。お昼なに食べます？」

「む」

食欲が好奇心を押し出したらしく、尻尾を放すと、代わりに水の入つた袋を引き寄せて栓を抜いた。

「そうだな、私は腹が膨れればなんでもいいぞ」

「……なんでも、ですか？」

「ああ。滋養が高いに越したことはないが、とりあえず体が動けばなんでも食べる」

恐らくアカシアの言つ「なんでも」と自分のそれの範囲が格段に違つことに気付いてはいたが、やはりからかつてみたい気持ちに負けた。

「よし、メーネ。昼飯はあれにするか」

「え？ なに？」

「ほら、だいぶ前に飯が三田ぐらい抜きだつた時。掘り返してさ……食つたろ？」

「え……え ？」

御者台で足をぱらぱらさせて座る少女の表情が凍りついた。

「なんだ？ 雑草とかか？ あれは当たり外れがあるがいけないこともない」

「ちがうもん……」

アカシアのその笑いもメーネの一言にぴたりと固まつた。

「……///ズ」

「//……」

からからとカルルは笑う。

「あれつて栄養はす」くあるみたいで。味と見てくれば最悪ですけど、食いつなぐ」とはできました

「食べたことが……あるのか？」

驚愕するアカシアにカルルは苦いものを浮かべた。

「仕方がなかつたとはいえ……あまり思い出したくはないですね」「…………」

アカシアの絶句に満足し、カルルは食料の麻袋を引き寄せた。

「はは、冗談ですよ。どうせ干し肉とパンくらいしかありませんし。ケルンに着いたら野菜を買いたいですね」

そう言つて干し肉を取り出して口に咥えると、その袋をアカシアに差し出した。

「なんだ、冗談か……いやおかしいとは思つたんだ」

安心して袋を受け取るとその中をまさぐつた。

「そうだよな、いくらなんでもミミズは食べられないよな」「え？」

「…………」

騎士は再び言葉を失つたが、それに気にせず話を変えた。
「でもまさか、本当にこんなのんびりと空を挿められる日が来ると
は思いませんでしたよ」

重圧から解放され、その分余計に感動に回すことができる。
それがこれほど素晴らしいものだとは思わなかつた。

「ああ……そうだな ん？」

つられて空を見上げたアカシアが目を細めた。

「どうしました?」

「あれは……」

指さした方向に田を向けると、空に一羽の黒い鳥が飛んでいる。

カラスではないようだ。

「…………？」

カルルが御者台に立ち上がりつて目を凝らしたのはその鳥に違和感

を感じたからだ。

何かが変だ。直感、あるいは本能のようなものがそつぱしている。

「怪鳥だ。……背中に兵士が乗っているな。おやじく私の件をケルンの国境警備に伝えようとしているのだろう」

「怪……鳥？」

言われてみれば確かに、人のような影が鳥の背中にちらりと見えた気がする。ともすればその鳥は相当な巨体とこことになる。

「あんなのがいるんですか……？」

「私も見たのは一回田だ。馬より早く、尙且つ安全に情報を運ぶことができる。怪鳥自体が希少な生き物だからやりあうことは無いだらうが、……まずいことになつたな」

その鳥が飛び去つていったのは荷馬車が目指すと同じ方角だ。

「……このままいくしかないだらうな。進路を変えるにしても、どうせ国境沿いの町にはすべて連絡が回つているだらう

重い空気の中、カルルが口を開く。

「で……でも、国境の向こうのローデリアはアリシルとそんなに仲が良いわけじゃないんでしょう？ いくら頼まれたからといって、ローデリアが協力するとは限らないんじゃ……」

言つていて不安を抱いた。国と国との関係がそれほど単純なものなのだろうか、と。

「…………。特に関係がないからこそ、これから優位な立場を築いていくための材料として貸しを作り出すのはあることだ。楽観的になり過ぎていたかもな……」

この時カルルは初めて、自分たちが追われている『国』という存在の大ささを理解した。

頭上の鳥（後書き）

先日、久しぶりにラノベを最後まで読み切れました。

「とある飛空士への夜想曲」という、先月映画が公開した「～～への追憶」の後日談にある上下巻一冊です。

高校時代に「追憶」を読んで「これ以上のは無いだらつ」なんて偏食野郎は思っていたのですが、「夜想曲」でもまた同じことになつたわけです。

内容はもちろんなの」と、尊敬せざるを得ないのはその参考資料の多さでした。

主人公のおそらくモデルとなつた坂井三郎氏関連の著書に始まり、世界観などにも多くの書籍を参考にして物語のリアリティを追及する様は物書きの手本として、私もかくありたいと思いました。

ある面白そうな話が浮かび、それをすぐに描き始めてしまうのではなく、プロット以外にも詳細な設定を描かなければ面白そうだけで終わってしまうという失敗を何度も繰り返した私には彼の姿勢は理想だったわけです。

ただそこには人が群れているだけならば、それは獸と見して変わらないだろう。

だがそこに『統治者』という立場が成立し、その集団を『国』として纏めると群れは大きく変貌する。

国となつた人の群れは、互いを守ることで自分を守るようになる。群れが大きくなればなるほどそれは強固に、安全に。

そうやって一人の力では打ち勝つことができなかつた自然の災害や野獸の脅威から身を守つてきたのである。

ところが、そんな無敵にも思える国という存在にも、ただ一つの天敵があつた。

自分たちと同じ人間の集団、國である。

それはいつの世も複数で決して一つには統合しえない。

そして互いに敵対していくても我が身に利益があるのなら一時的にも手を貸すというのは、人が獸以上に獸らしいことを裏付ける一面ではないだろうか。

「 ほう、あの英雄が。しかも、このケルンに現れるかもしれない」と

わざとらしく驚いたのは、本当にこいつ『事件』が久しぶりだつたからだ。

母国ローデリアから派遣され、この町で警備を担つようになつてから自分はもうすぐ一年になる。平和すぎる日常からかけ離れたそれは何とも刺激的な話だった。

「ええ。どうかご理解とご協力のほどを願います。……では、文書は確かに渡しました。私はこれにて」

「おや、もうですか？ アリシル王からの使いの方にお茶の一杯も

出さないで帰したなどとあつては、国境警備隊の礼儀を疑われてしまいかねません。美味しい茶があるんですよ」

「……この他にも回らなければならないので、申し訳ありません。では、ケルンの茶は美味かつたと伝えておきます」

終始無表情だった若い兵士が、一瞬だけふっと薄い笑みを見せた。いかにも高貴な見た目の彫金の装飾が施された鎧を着た兵士は、おそらく伝令兵の中でも一等の階級の者なのだろう。怪鳥といい、いくらローデリアの膝元の警備隊とはいえ、馬鹿丁寧過ぎるのは確かだ。見栄を張っているのか、ただ真摯なのか。

アリシルの王はまだかなり若いと聞く。若さ故の誠意かもしれない。それとも、誰か悪い大人に耳打ちでもされているのだろうか。飛び去つてゆく怪鳥を見送りながら短い顎鬚を擦つた。

それにしても、ほんの数年前には戦神とまで謳われた者を捕えろとはかなり無茶を言つたものだ。自国の英雄の処分こそ聞かない話ではない。……だが、それに他国の力を借りようなど。大抵は意地でも身内だけで処理する『不祥事』なものなのだが。

「自慢の英雄が落ちぶれていることをわざわざ他国に教える理由はなんだ？ 恥は隠すものだ……」

今のアリシル王の判断にはどうも疑問を抱く。アカシアがもし本当にこのケルンに現れたものならば、その見極めに利用させてもらうのもいいかもしれない。

隊舎に戻った彼は開口一番、部下にこう言い付けた。

「クラーストを呼んでくれ。じつじつのはあいつのほうが得意だ」

怪鳥の一件以来、カルル達は特に何事もなくケルンへの道を進むことができていた。

早馬に刺客を乗せて王都から追つ手をかけたとしても、返り討ちに遭うばかりではいずれ見失つてしまつ。ならば怪鳥で情報だけでも先回りさせて待ち伏せしてはどうか。

というのが、アカシアが予想したアリシルの作戦だった。

「本当に……不気味なくらい平和ですね」

「やうだな。ここまでくると今度はケルンに入るのが不安になる。
さつきまではそこに着けば安泰だと言っていたのが」

アカシアの予想が当たつていたとすれば極端な話、単騎で彼女に
勝てる刺客はアリシルにはおらず、それを王も理解しているといふ
ことになる。

そんな猛者がこのか細い娘だというのだからカルルは今だに違和
感を感じてならない。

野生の狼を切り伏せ、槍を持った兵士に包囲されても生き延びる
ことが一体どれだけの人間にできようか。

しかしそれを目撃したカルルが信じないわけにはいかない。

暇つぶしも兼ねて、何か武勇伝の一つでも聞いてみたくなつた。
「アカシアさん、そういう『戦神』ってすごい肩書きですけど。
なにをしたらそんなふうに呼ばれるんですか？」

いくらかの間を挟み、その問いにアカシアは軽い笑いを交えて答
えた。

「なにをしたら、か。同じことをずっと繰り返しただけさ。戦神な
んて響きは良いがあれはしにが」

「うわっ」

地面から顔を出した岩に車輪が乗り上げ、荷馬車が大きく撥ねた。
馬をなだめてカルルが呻き声に振り向くと、荷台で昼寝をしてい
たメーネが頭を打つたのか悶えていた。

「…………！」

「大丈夫か？」

アカシアがメーネの頭に手を伸ばす。

「さ、さわんないで」

「そんなこと言つている場合ではないだろ？　ほら、いいから」
半ば強引にメーネの手をのけ、その手が初めて獣の耳の間に触れ
た。

「……たんこぶになつているな。なら心配はなさそうだ」

「平氣だよ……」

口では嫌そうにしているものの、もつその手を払おうとはしなかつた。

「打撲を侮つてはいけない。以前、そこから悪魔が入つて自分で腕を切り開いた奴がいた」

「悪魔……？」

「打つたところがものすごく腫れ上がり、激しい痛みだったそうだ。だからそいつは悪魔を焼き殺すために短剣を火で炙つてな。こう、ぐりっと」

とりあえずカルルは耳に入らないように操舵に専念することにした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6273w/>

草原の歌に花言葉を

2011年11月27日16時58分発行